

伊藤仁斎と朱舜水・安東省菴一門との交流 ―礼及び文章の作成をめぐる―

杜 絡嘉（関西大学大学院）

要旨

伊藤仁斎と朱舜水・安東省菴との関係について、これまでの先行研究はかなり詳しく論じている。例えば古い研究の中では、石田一良氏の論文「仁斎学の形成過程 青壮年時代の仁斎の思想と環境」が仁斎と朱舜水とのやりとり及び朱舜水の仁斎に対する影響を詳しく論述している。また最近の新しい研究の中では、澤井啓一氏の『伊藤仁斎』（ミネルヴァ書房）の第二章第四節が、朱陸異同という視点を通して、伊藤仁斎と舜水・省菴とのやりとり及び影響を再確認している。両氏の研究はいずれも優れたもので、重要な視点を提供している。

しかしながら、上述の研究にはまだ研究の余地が残されていると考えられる。そこで、本発表ではその不足を補う試みを行いたい。すなわち仁斎と舜水、省菴及びその門人とのやりとりにつき、基本的に寛文中期を中心に、その経緯を描くこととする。発表者は舜水・省菴が仁斎に与えた影響は、二つの中心があると想定している。一つは礼に関する事柄、具体的に言えば、中国の礼制及び礼の本質に関する思索である。礼は間違いなく寛文年間の仁斎が思索した対象の中心の一つであり、それはこれまで構築された仁斎像とはやや違うイメージを示すものと思われる。

もう一つは文章の作成に関する事柄である。寛文年間及び以前の仁斎の文章は、実は朱舜水の手で修正されたものが多いと想定できる。舜水が仁斎に与えた最も深い影響は、こうした文章の作成の方法であったように思われる。そして、後に仁斎が実学を強調するようになるのも、舜水の影響であろう。その実学の内容のかなり重要な一部は、明らかに文章の作成方法に関わっている。その影響について、本発表では仁斎の天和日記及び東涯の元禄2年・3年・9年の日記を中心に考察する。作文が古義堂の最も重要な課題になることは疑いのないところである。

本発表は以上の二つの論点を明らかにする試みである。